

抑

情

欲

川端康成選集 第二卷

抒情歌

昭和31年 5 月21日 印刷

昭和31年 5 月25日 發行

川端康成選集

第二卷

(第五回配本)

抒情歌

定價 二六〇圓
地方賣價 二七〇圓

著 者 川 端 康 成

發行者・東京都新宿區矢來町

七一 佐藤亮一 印刷者・東

京都千代田區神田神保町三ノ

二三 塚田重 印刷所・塚田

印刷株式會社 製本・加藤製

本所 *落丁・亂丁本はおとりかえいたします。

發行所

株式會社

新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七一—八番
振替東京八〇八番

目次

虹		五
淺草日記		六九
淺草の姉妹		一〇三
二十歳		一四一
十六歳の日記		一六七
抒情歌		一〇一
禽獸		三三
父母への手紙		二六

抒
情
歌

虹

（この子をあげます。可愛がつて下さい。——踊子一同より）

さう書いた手紙を花子に持たせて——けれども、木村さんが好きだから泊りに行くとは、花子自身が言ひ出したことで、^{ふじこ}懷に押しこまれた手紙の文句などさらに頓着なく、兩手を振り振り、カスタネットまがひに四竹を鳴らし、花子が先頭に立つたから、踊子達はただ彼女が木村のアパートに入るのを見とどけるためについて行つたといふ風だったが、その歸り、踊子達は火がついたやうにはしやいで、夜櫻の上野公園まで遠歩きたあげく、綾子の家で眠つたのは、もう電車の音が聞える明け方だったのに、綾子はやつぱり九時に目が覺めた。

彼女は毎朝日本踊の稽古に通つてゐる。十日替りの興行で、初日は終演の後で舞臺寫眞、四日目からは次の出し物の稽古、はねて直ぐ歸れるのは、二日目と三日目だけだから、綾子はよく樂屋で居眠りをする。風呂のなかで、血の氣を失ふ。それでも、一生結婚せずに、踊の師匠として身を立てる決心が固いので、朝の稽古通ひは怠けない。

綾子だけがまだ髪の毛を切つてゐない。昨夜盗み折つた櫻の花が、彼女の頭から脱け落ちて、隣りの藤子の少し汗ばんだ頬の下敷きになつてゐた。四人が一つの寢臺に寝たのである。頭の方から二人、裾の方から二人、さしちがへに體を押しつけて、その窮屈な温かさが甘い

疲れであつたけれども、綾子は一人でさつさと家を出た。夜公園に出る人相見の父も、まだ眠つてゐた。

いきなり木村をからかつてやるつもりで、アパートの二階へわざと調子づいてあがつて行き、黙つて扉をあけると、そこに花子が眠つてゐて、綾子はふつと立ちすくんだが、花子一人であつた。まさか花子が今朝までゐると思つて來なかつたので、ぼんやり立つたまま眺めてゐた。

枕もとには黄色に紅のしぼりの兵児帯が、長く解け落ちて、四竹が散らばつてゐた。しかし着物のまま寝てゐた。人絹の長い袂が兩方とも、蒲團からひっぱり出したやうに、頭の上の畳まで擴がつてゐた。濃い口紅は昨夜のまま綺麗に整つてゐたが、少し靦いた黄色い齒にうす赤くにじんであつた。

花子は數へ年十一である。

ガラス窓に白木綿の日除^{ひよけ}だけで、四竹の手垢や長襦袢のよごれは侘しいながら、ませた化粧は反つて寝顔をよけい子供つぽく見せてゐた。

「えらい子供！　しつかりねえ。」と、綾子はなんとなく呟いて、一三度陽氣に首を振ると、そつと扉を閉ぢた。うつ向き勝ちに足を急がせた。

花見時なので、客足が早いためか、もう木馬館の戸があいて、女給が動かぬ木馬にはたきをかけてゐた。その前に人だけがあるのので、綾子ものぞいてみると、四角い行燈^{あんどん}のやうな

廣告を背負つた浮浪人風の男が、手足の骨の折れた蛙のやうにもがいてゐた。なにかの中毒患者なのだらう。翼のはこりじみた鳩が二三羽飛んで來た。見物人達も動かぬ廻轉木馬のやうな顔をしてゐるのが多かつたが、そのなかで一人だけしやがんで、病人の苦しむありさまを、まじろぎもせず眺めてゐるのは、木村だつた。

木村を見つけると、綾子はふと心が明るんで、うしろから肩を叩いた。木村は目が覺めたやうに立ち上つて、綾子の後からついて來た。

「なにを見てんのよ。むつかしい顔して。」

「うん。」

「花子まだ寝てたわよ。可愛かつたわ。」

「足がしびれちやつた。」と、木村は腿をさすりながら、

「あの人足を誰か介抱してやるかと思つて。」

「それでしやがんで待つてたの？ 馬鹿だわね。」

「お稽古に行くの？」

「ええ。眠いわ。昨夜あれから三人、うちへ泊つたのよ。上野公園まで行つたの。それから寢臺のなかで、朝まで大騒ぎして。でも銀ちやんだけは直ぐ寝ちやふわね。憎らしいわ。」

「銀ちやんの體は冷たいね。」

「え？」と、綾子は木村を見つめた。

五重の塔の傍の高い銀杏の若葉が朝日を受けて、眩しいやうに明るい緑だった。子守に抱かれた赤ん坊が、まだもののうまく投げられぬ手つきで、鳩豆を撒いてゐた。

「ああ？ 木村さんはよく銀ちやんと踊るのね。幕明^{まくあき}やなんかに。」

「氣味が悪いね。」

「さうかしら。女の體は冷たい方が踊りいいつて、中根先生が言つてたわ。」

「そんなことどうだか知らないよ。銀ちやんがあんまり一生懸命に踊るからさ。あんなのきつと薄情だよ。」

「さうかしら。どうしてなの？」

「今朝ね、花子が僕のことを薄情だつて言つたよ。僕が先に起きてね、出かけようとしてね、あの子を起すと、あら、木村さん、薄情ねえ。ころげるほど笑つちやつた。」

「それからまた、あの子ひとりで眠つちやつたのね。」

「どうして花子を僕んそこへ泊りによこしたの？」

「そんなことが分らないの？ 私達がね、みんな木村さんを好きだからよ、きつと。私はさう思ふわ。」と、昨夜彼女の頭に閃いた祕密を、人の噂でもするやうに投げ出して、自分はずるいと思つたのに、木村は顔色も動かさないの、なにかひけめを隠す風に綾子は、

「あきれた子供ね。木村さんのお嫁さんになるんだつて、いつもえらさうに言つてるのね。」

「あんまりよくしやべるから、僕は眠つてる女の子が一番好きだつて言つてやつたんだよ。」

さうしたら直ぐ寝ちやつた。」

「可愛くなつて来るわね。」

「ほんとだ。」

「眠つてる女の子が好きなの？　ふうん。」

「なんだい。」

「考へてるのよ。いいことを聞いたわ。」

「寝る前に、自分でちやんと金の勘定をしてたよ。なんだかきたないきれの袋みたいな財布を帶にくくりつけてゐるんだ。田舎のお婆さんみたいなんだよ。ひと晩にあんなにもらひがあるのかな。」

「いくらあつたの？」と、綾子は早口になつたが、ふと顔を赤らめて、

「ね、木村さん、花子と私と、どつちがませてると思ふ？　花子はあばずれな口をきくんでひいきが多いんだけれど、子供だからあんなに出来るのだわ。可愛い片端^{かたは}ね。あの子をおもちやにしてるつもりの者が、みんなあの子のおもちやにされてるんだわ。私妙なこと考へてるでしょ？　この間ね、西林さんね、雑誌のひと私達お茶を飲んでる時に、お前達は自分の財布に、いくら入つてるか、正確に知つてるかつて。私だけよ、知つてるつて、直ぐ言つたの。みんな知らないんだつて。嘘だわね。私は嘘なんか言へないわ。西林さんのところへ行つてね、果物やなんか食べるでせう、いつも私がバナナや林檎の皮を新聞紙につつんで来て、

歸り路で捨てるのよ。綾子は可哀想だから結婚してやらうかつて、西林さんたら、からかふのよ。私みたいな、舞臺の人氣にんきは出ないわ。私そんなに姉さんぶつてゐて？」

「さあ？」と、木村は無心に口笛でも吹きさうに、

「毎朝日本踊の稽古かまなんかに通つて、どうすんのさ。」

綾子は突つばなされたやうに立ち止まると、

「あんた、人のいふこと、なんにも聞いてないのね。どうつてどうよ。」

「そんなに勉強して、なんかになんの？」

それは子供じみたあどけない言葉つきだが、冷たいうつろな聲であつた。

綾子はしかし腹立ちはしなかつた。彼女より一つ下の十七のこの少年は、誰もがまともに怒れないやうなところがあつた。綾子は反つて生眞面目きまじめな氣持がつのつて來て、

「レヴエウの踊子なんか、私の柄ぢやないのよ。踊の名取りになれたら、直ぐに止すわ。お嫁入りも出来ないわ。」

「どうしてさうきめてるの。」

「いやよ、そんな、子供がものを聞くみたいなの。」

「僕は誰ともうまく話が出來ないんだよ。」

「さうね。木村さんが相手だと、舞臺でせりふをとちるつて、蝶子さんが言つてたわ。あんな綺麗な人と芝居をするのは、いやだつて。だけど、綺麗なからぢやないわよ、きつと。踊

の稽古に通つたつて、なんにもならないつて木村さんに言はれると、私もう今日は休みたくなつちやつたわ。あんたは將來の目的を考へたことがある？　なんになるつもりなの。」

「飛行家になりたいんだけどね。」

「飛行家？」と、綾子はあまりに唐突な言葉なので、思はず鸚鵡返ししたが、少年の聲の響きには、なにか痛ましい空つぽな夢があるのに氣がついた。それを隠すやうに笑ひながら、「をかしいぢやないの、だつて、飛行家になりたくて、木村さん地下鐵に勤めてたんでせう。落語みたいだわ。天の上を飛びたくて、地の下にもぐつてゐるなんて。」

木村は地下鐵の少年車掌だつたのだ。三田の學生に似たしやれた制服姿は、やはらかい貴公子型の彼を小意氣なものにして、淺草のレヴユウ女優の噂の種にまでなつてゐたが、綾子達一座の蘭子が、どう誘惑したのか、仲間へひつぱりこみ、彼女のアパートへ住まはせたのである。小屋から小屋を渡り歩いた、淺草くづれの年増としま女優の常として、彼女はこの二月、旅興行のレヴユウ團に買はれ、無論木村も連れて行つたのだけれども、木村は甲府から一人ひよつこり戻つて來た。逃げ出したのだといふ。

しかし、彼は平氣な顔で蘭子のアパートに住み、もとの小屋で働いてゐる。蘭子から手紙の來る様子はない。二三年前に別れたはずの蘭子の亭主といふ男が、二三度アパートへやつて來ては、彼女のわづかな衣類などを勝手に持ち出して行つたが、木村は氣にもかけない風だつた。

綾子が踊の師匠の家へ行くとわかつてゐるのに、木村はどこまでついて来るつもりなのか、しかし、まるで彼女のことなんか眼中にないやうな顔つきで、かといつて、自分自身のことばかり考へて歩いてゐるやうでもなささうだし、結局これでもなんとなく綾子に惹かれて来るのだらうが、さて綾子がさう思ふと、反つて取りつく島がなく、妙に別れにくいのであつた。それに彼女はなんだかいよいよ眞面目くさつて、うすら寂しくなつてしまふ。

つい廻り道と知りながら、隅田公園に出ると、櫻が咲いて囀が飛んだりしてゐる。よく見る景色だが、綾子はひどく珍らしいやうであり、ほつと助かつた氣がして、

「世間は廣いわ。」といふやうな言葉が浮んだ。

木村を揺すぶつて、希望を持たせてやらうと思ふのだが、どうとも出来なくて、ただ寄り添つて歩いて行つた。

花子をおだてて泊りにやつたのも、木村を好きな踊子達の身代りだとまで、綾子はさつき解剖してみたが、そこにはなにかもつと自分達にとつて危険なものがひそんでゐさうに思はれ出して來た。

四竹よんたけを鳴らしながらカフェや小料理屋を門かど附けして歩く、歌唄うたばひの子供の花子なんかまで、木村のどこをあんなに好くのか、綾子はこはくなつて、花子のあどけない寝姿を心に描いた。

銀子は湯上りの體に稽古着一つで、オレンジを握つて樂屋口へ駈け出して來た。斷髪を無

造作に耳のうしろへひっかけて、まる出しの顔に眉が薄いから、けはしい表情の人形じみて見えたし、その上、掌のオレンジで片頬をぎゆうぎゆうこすりながら、そつぽを向いてゐるので、顔なじみなのだが、新聞記者は少し改まつた口調で、宣傳だとか、出世だとかいふ言葉やさやいたけれども、銀子の實感からは遠いものらしく、そんな新聞は見たことがないなどとあけすけに言つて、誘ひ出しに應じようとはしなかつた。記者はいらいらして、館主の頼みを受けてゐるなどと今度はなだめすかしにかかつたが、銀子はむつとり口を閉ぢてしまつたところへ、藤子が樂屋から出て來ると、銀子はいきなり藤子の首へ抱きついて、

「藤ちゃん、いつしよに行つてくれる？」

「いらつしやいますし。」と、藤子は如才なく記者へ挨拶してから、

「お茶を飲みに行くの？」

「ええ、さうよ。」

「行くわね。」と、二人は首を抱き合つたまま、樂屋へよろけて行つた。

樂屋口の堀の外には、もう一人若い男が待つてゐた。

銀子は自分の月給が、いくらであるか知らないと言つても、先づほんたうであつた。父親が月に二度か三度前借に來た。銀子はいやがつて會はなかつた。父親も樂屋へ行くやうなことは滅多になく、たまには客席の隅から舞臺の銀子を、ちよつと眺めて歸るのだった。彼は